ナビゲーター



橋本努 はしもとっとむ

1967年生まれ。北海道大学大学院経済学研究院 教授。経済社会学、社会哲学。主な著書に『自 由原理 来るべき福祉国家の理念』(岩波書店)、『消 費ミニマリズムの倫理と脱資本主義の精神』(筑摩選 書)、『経済倫理=あなたは、なに主義?』『解読 ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主 義の精神』』(以上、講談社選書メチエ)、『自由 の論法 ボバー・ミーゼス・ハイエク』(創文社)、『帝 国の条件 自由を育む秩序の原理』(弘文堂)、『自 由に生きるとはどういうことか 戦後日本社会論』『学 問の技法』(以上、ちくま新書)など多数。

文化のミッション、創造のヒント

最近、北海道でも世界自然遺産や北海道遺産など、「遺産」と 名づけられるものが多くなってきました。文化的な遺産は、一度衰 退した文化を私たちが記憶にとどめて、そこから新しい発展を展望 するための資源となります。

他方で私たちは、情報技術(IT)の爆発的な発展を経験しています。コンピュータが人知を超える臨界点とされる「シンギュラリティ」に向けて、不安と同時に希望を抱いています。 I T社会は、私たちをどこに導くのでしょうか。文化や芸術は、私たちの未来社会をたくましく想像するための活動として求められています。

1990年代後半以降の情報化社会のなかで、日本を含めた先進諸国の文化政策は総じて、R・フロリダのいう「創造資本」を追求してきました。経済を発展させるためには、人々の創造力を鍛える必要がある。多くの人々が創造的な活動に携わらなければ、経済は豊かにならない。このような発想から、日本の文化政策では例えば、芸術作品と市民のインタラクティブなコミュニケーションが重視されてきました。

ところが現在、こうした発想の文化政策が岐路に立たされています。一方では文化遺産の増大を受けて、他方ではITの加速的な進歩を受けて、私たちは文化の向かうべき方向性を、改めて探らなければなりません。世界遺産など、日本という一国の視点をこえて、グローバルな視点で文化を意味づける必要性も増しています。

文化とは本来、人々が自身の精神や魂をやしなうことであり、そのような機会があるときに社会も発展します。必要な視角の一つは、私たちの精神を導いてくれるロール・モデル(参考になる生き方)を、さまざまに知ることであるかもしれません。私たちは生き方の問題を提起する芸術作品から、さまざまな刺激を得ることができます。あるいは地域の芸術家から、その作品だけでなく、アトリエの様子などを含めて、創造的な生活に刺激を受けることがあります。なにも高名な芸術家である必要はありません。市井の芸術家たちもまた、私たちの生活を一歩、能動的な方向へ後押ししてくれるでしょう。

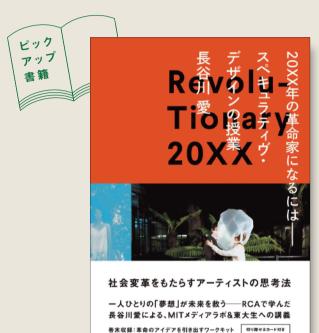
北海道にも参考になるロール・モデルがたくさんあるに違いありません。そのような「語り」を豊かにすることは、文化資本の蓄積ともなります。こうした視点を含めて、本企画でお招きするトーク・ゲストの方々から、さまざまに学びたいと思います。

回目

ゲスト 長谷川 愛

日 時 | ²⁰²¹ 9.19 sun 14:00-16:00 会 場 | SCARTSモールA・B 定員数 | 50名





ビー・エヌ・エヌ新社、2020年

20XX年の革命家になるには―― スペキュラティヴ・デザインの授業

「あなたは20XX年の革命家です。いまから数十年後、未来の世界のどんな部分を、どのように変えていきたいですか?」こんな挑発的な問いかけから始まる本書は、未来をたくましく想像するためのツールです。社会を先取りして生きるためのヒントがたくさん詰まっています。「自分は革命家ではない」と思われるかもしれませんが、革命とは、現在の社会といまの自分の生き方を見直すための、ラディカルな思考実験です。本書で紹介されるスペキュラティヴ・デザインは、刺激的な仕方で新しい生き方を探ります。と同時に、新たな社会問題を提起し、社会を見通す目を養います。本書を通じて、未来を生きる魅力的なロール・モデルを探ってみませんか。

長谷川 愛 はせがわあい

アーティスト。生物学的課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表している。IAMAS卒業後渡英。2012年英国Royal College of ArtにてMA修士取得。2016年MIT Media LabにてMS修士取得。2017年から2020年まで東京大学にて特任研究員。2019から早稲田大学非常勤講師。2020から自治医科大学と京都工芸繊維大学にて特任研究員。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等国内外で多数展示。著書「20XX年の革命家になるには――スペキュラティヴ・デザインの授業」



ピック

アップ

書籍

が野 祐

 日 時 | 2021 10.30 sat 14:00-16:00

 会 場 | SCARTSコート

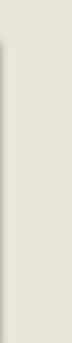
 定員数 | 50名*

Legal Design

Tasuku Mizuno

水野祐





フィルムアート社、2017年

法のデザイン

創造性とイノベーションは法によって加速する

法のデザイン

創造性とイノベーションは法によって加速する

アフターインターネット時代の文化を駆動する新しい法の設計

クリエイターの"自由"を守り、表現を加速させる気鋭の弁護士の初の著書

,ビゲーターから一言

フ

音楽、出版、アート、写真、ゲーム、ファッション、二次創作・・・こうした創造的な活動を世界に通用する文化産業として育てるためには、どんな政策が必要でしょう。本書は、そのための政策を法と「アーキテクチャー」と呼ばれる制度的な仕掛けの2つの観点から分析し、デザインすることを提案しています。法律は一般に、人々の活動に規制をかけるものだと思われていますが、法律の想定を超えるような技術が次々に生み出される現代社会においては、むしろ強力な法があったほうが、人々の創造活動を刺激することができます。弁護士でもある著者の水野氏は、リアルな法実務の観点から、文化創造のための行政の役割を提起します。「法」×「デザイン思考」=「リーガルデザイン」という新しい考え方の提唱です。

ゲー 水野 祐 みずの たすく

法律家。弁護士(シティライツ法律事務所)。九州大学GIC客員教授。Creative Commons Japan理事。Arts and Law理事。慶應義塾大学SFC非常勤講師。note 株式会社などの社外役員。著作に『法のデザインー創造性とイノベーションは法によって加速する』、共著に『オープンデザイン参加と共創から生まれる「つくりかたの未来」』など。

.....

Twitter: @TasukuMizuno



会 場

定員数

SCARTSスタジオ

50名





九州大学出版会、2020年

炭鉱と美術

旧産炭地における美術活動の変遷

ヒゲーターから一言

本書は主に九州と北海道などの産炭地で、どんな芸術活動が営まれてきたのかを丹念にたどっています。炭鉱夫は、一時は花形の職業でした。芸術家として頭角を現す人たちもいました。北海道では、リタイヤした炭鉱夫や地域の人たちもまた、重要な芸術活動の担い手でした。現在、旧産炭地は歴史文化的な遺産として注目されますが、では「遺産」として記憶にとどめるために、アートは何をなしうるのでしょう。そしてアートは、衰退した地域をいかにして再生しうるのでしょう。本書は、産炭地における近年のアートプロジェクトを事例ごとに検討しています。今後の文化支援のあり方を考えるうえで貴重な一冊です。

國盛 麻衣佳 くにもりまいか

アーティスト。福岡県大牟田市生まれ。先代が炭鉱関係の仕事に従事していたことから地域の歴史に関心をもち、2007年より炭鉱をテーマとした制作活動や美術研究を行っている。女子美術大学美術学科洋画卒、東京芸術大学大学院修士課程美術研究科壁画専攻卒、九州大学大学院芸術工学府環・遺産デザインコース卒、博士(芸術工学)。最近の活動としては、2018年 九州芸文館筑後アート往来2017→2018「藝術生活宣言-だって楽しいんだもん!-」、2021年 直方谷尾美術館「黒ダイヤにまつわること」出展。2020年『炭鉱と美術―旧産炭地における美術活動の変遷―』(九州大学出版会)出版。同著は2021年第15回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を受賞。

ストプロフィー

※ 新型コロナウイルスの感染拡大状況等により、定員数は変更になる可能性があります。